## プレ企画 I 「中堅者の語り場 ~私たちの MUST~」

特定非営利活動法人 グループホームネット香川 増田 周作

ワークライフバランス (仕事と家庭、育児との両立)、経験年数+ $\alpha$  (経験したことに初心を忘れないこと)、関係づくり、ネットワークづくり、必要なつながりについて、まず話題提供者から話があり、4 グループに分かれてグループワークを行った。

私が参加したグループは、それぞれの職場で10年から15年ほど精神保健福祉士として職務経験のある人たちであった。新人職員を指導する立場にあったり責任のある立場を任されるようになったりして、新人職員のときとは違った業務にも携わりつつこれまでの業務にも携わりつつこれまでの業務もこなしたり、外部との交流も多くなり、働き始めたころの思いを忘れていたり、大切にしてきた



こともついおざなりになったりすることがあるという話が出た。自分たち自身が仕事を楽しむことで、クライエントとのかかわりも変わってくるという意見が賛同を得た。

最後に、林道倫精神科神経科病院の星昌子 氏からこれまで働いてきた経験、家庭と仕事 の両立について、働くことの楽しみや苦労に ついて話を聞いた。

仕事を長く続けていくと、そのときそのと きで苦労や悩みが尽きないものだと思った。 周りが見えていないと自分だけが大変でしん どい思いをしているのではないかと錯覚して しまうが、そんな時に、職場の同僚、先輩や仲 間の精神保健福祉士を頼ることの大切さを改 めて感じる企画であった。



プレ企画 II 「ソーシャルワークとしての障害年金申請支援 ~PSW が行う意味について 考える~」

一般財団法人 大西精神衛生研究所附属

若葉

片岡 克寿

障害年金申請にあたって、クライエントは不安を抱えている。まだ働けるという思いや、世間体、家族の反対などが不安の原因である。ではなぜ申請するのか。親に頼りきれない、将来が不安などの気持ちがある。「もらいたい、けどもらいたくない、けどもらいたい」といったジレンマをクライエントは抱えている。PSW はクライエントが抱えているそういった葛藤にも気づかないといけない。

PSW は、年金申請支援を通してクライエントの思い描く生活を共有し、支援の意味づけをする。また、本人が自分のこととして、主体的に取り組めるよう援助するかかわりを通して、クライエントが自分の人生と向き合うプロセスに寄り添う。一緒に苦労を味わうことで、クライエント自身も PSW に対しての信頼感を抱くようになり、問題に立ち向かう力を得ることにつながる。 PSW は、年金申請支援という一緒に苦労を味わう共同作業の中で、クライエントの様々な葛藤や不安を支え、変化の過程を見守る。また、時間とエネルギーをかけてでも、クライエントがしっかり体験できるよう支援を行ってゆく。

大歳明子氏が講演の中で上記を強調していたことが強く印象に残っている。私も年金申請支援をしたことがあるが、講演であった PSW としての視点はまったく意識できていなかったように思う。ただ、病歴書の作成は必ず本人とともに行っており、この過程で、

「一緒に苦労を味わう」体験はできたように感じている。今回の講演を聞いて、PSW としての視点をしっかりと意識しながらクライエントとともに年金申請支援を行えば、クライエント、PSW ともに、もっと様々な体験を獲得できると考えた。



竜雲メンタルクリニック 下河 芳子

基調鼎談は、富島喜揮大会長による進行のもと、柏木昭氏、門屋充朗氏、梶元紗代氏という錚々たる顔ぶれに PSW としての誇りというテーマで語っていただくというものであっ

た。

まず、柏木氏による小講演が行われた。 「相互主体的にかかわること」=「協働」は、ワーカー・クライエント関係のみの特徴であり、今私たちはワーカーの知識・技術を敢えて抜き放してでも「かかわり」を再認識すべきである。そして地域がクライエントをどう気にかけ、地域はクライエントの望む生活を支援するのに相応しいか



も気にかけよう、と語りかけた。梶元氏は、かかわりは私たちを原則に引き戻してくれる PSW の核心であり、ずっと『かかわり』と言い続けているが、まさに今の問題であると呼応した。

門屋氏は、「精神保健福祉士業務指針(第2版)」にふれながら、病院であれ地域であれ、その底に流れる PSW としての基本がむしろ大切であり、法律や指針にある仕事だけがソーシャルワークではないことを再確認すべきであると述べた。さらに、病院・診療所のワーカーは、二重拘束が前提条件としてあることを自覚し、その困難を克服する力を地域社会に求めるべきであり、地域のワーカーも事業所という制度の限界を超えていく必要がある、医療が変わらないのは制限を超えるソーシャルアクションをしていないからではないかと問題提起した。梶元氏は、二重拘束について学生の頃から考えさせる教育が必要で、ワーカーは悩み揺れながらやっていくことを大切にしてほしいとメッセージを送った。



最後に富島大会長が、本人と向き合う こと、そして本人と一緒になって闘うこ と(=協働)の重要性を強調して締めく くった。

会場の参加者は、先駆者たちが語る一語一句に自問自答しながら耳を傾け続けていた。柏木氏が「自分の胸に手を当てて考えてみて下さい」と一人ひとりに問いかけた場面では、会場に緊迫した空気が流れた。私たちは、後輩として継承

すべき PSW の誇り、普遍性とは何かをこの鼎談で確認し、「バトン」を受け取った。この会場で自分の中で起こった出来事を何度も思い返し、自分の立ち位置で何をすべきか、今後も考え続けていきたい。

四国学院大学 片岡 信之

「特別報告」では、香川県精神保健福祉士協会(以下、協会)元会員の倫理抵触事例の発生に関して、これまで数年間にわたって、協会がどのように対応し、再発防止のための取り組みを行ってきたかが報告された。

まず、香川県精神保健福祉士協会会長の詫間佳子氏が説明を行った。当初の混乱を乗り越えて会議を重ねた末、協会は「健全化推進委員会」を立ちあげ調査・分析を行った。その報告書では、事の経緯を詳細に記すとともに、特定の個人の問題として終わらせるのではなく、問題の背景にある構造的要因を改善する必要性を指摘し、今後、協会をあげて継続的に再発防止に取り組んでいくことを提



起した。その提言を実現するため、健全化のための6年間の長期計画を策定・実施していく と同時に、香川県独自の倫理ガイドラインの作成に着手することとした。

次に、同協会の「健全化に向けたガイドライン作成委員会」委員の照下善則氏が、完成した『精神保健福祉士のガイドライン~私たちはこうありたい~』(以下、『ガイドライン』)を参照しつつ報告を行った。既成概念にとらわれず、精神保健福祉士として大事なことは何かを最初から考え直すところから始め、一つひとつ下から積み上げた内容を自分たちの言葉で表現することをめざした。本当の意味での倫理とは、上から与えられたものを覚え込むのではなく、専門職としての自分たちの経験や思いを吟味する中から主体的につかみとる



ものと考え、「~ねばならない」ではなく、「~ありたい」という文体をとっている。精神保健福祉士相互の関係において私たちはどうあるべきかに力点を置き、協会の役割の明確化につなげている。『ガイドライン』を自分たちの手で作り上げたことで、精神保健福祉士としての「根っこができた」と感じている、と総括された。

『ガイドライン』には第Ⅱ部として事例集が用意されており、協会は継続的に『ガイドライン』を使った研修を行っている。倫理向上のための取り組みに終わりはない。協会として、原点の痛みを忘れず、精進を重ねていくことの大切さを強く感じさせられた報告であった。

医療法人社団 三愛会 障害者就業・生活支援センターくばら 高田 裕子

この企画では、香川県精神保健福祉士協会の齋中康人氏の司会により、島根県の周藤美由 紀氏、高知県の宮本彰氏、鳥取県の松村健司氏にご登壇いただき、これからの県協会活動の あり方について、また協会員の協会活動への主体的参加を得ていくためのそれぞれの取り 組みについて、自由な話し合いがなされた。

まず、県協会ではどのようなことをしているのか、主体的に参加をするとはどのようなことかについての考えを聞いた。各県によって地域性もあり課題はそれぞれ違っている。研修会の参加を促すため、県毎に工夫をしながら計画を立て対象者や内容を変えて開催しているが、参加者の多いものと少ないものでばらつきが見られることには共通点があった。

会員たちはそれぞれ、各々の環境で日々の業務に追われているのが現状である。業務のことは自分の職場で解決することが普通になっているが、お互いが普通と思っていることを探り自分の実践を確認することは欠かせないはずだ。自分たちの視点についてなど、日常的にチェックすることが難しいことを県協会研修会で職場以外の人と交流することで行えるのはとても大きいとの話があった。

また、県協会でみんなが集まって、やる気をもらえ頑張ろうと思えることを経験していない人はもったいないのではないか、思いを共有できると仕事が楽しくなることを実感することが大切との話もあった。自分自身を振り返り確認できる機会になるように、自分のエネルギーをもらえる場所であり、指摘し合える仲間がいることで仕事が好きになること、つながるから仲間になる、職場以外に仲間と言える人がどれだけいるか、との話は考えさせられるものがあった。

私自身も、日々の業務と家庭との両立の中で協会研修会になかなか参加できていない一人であり、耳の痛い話が多かったが、改めて協会の仲間の大切さや協会のありがたさを実感した。今後、PSW実践の振り返りを仲間と一緒にしていくために、研修会に参加して後輩たちにも勧めていきたいと思う。



## 分科会 I 「地域実践/PSW としてのあり方」

医療法人社団 光風会 三光病院 上杉 雅司

分科会 I では、地域での実践について各県から 4 題の発表があった。病院や施設という 枠組みを持ちながらどのようにアウトリーチをすすめていくのか、その上での苦悩や工夫、 また外側ではなく内側、実践する上で不可欠な PSW としての活力等に焦点を当てた発表が 行われた。

中でも徳島県の医療法人冨田病院 の発表が印象に残っている。冨田病 院のある地域では過疎化も進み、休 耕田畑が目立つ状況であった。そこ に目をつけ、農作業や農産物加工、販 売などを当事者が担った。田畑を貸 す人にも当事者にも利益が入るとい うまさにWinWinの関係である。ま た講演を開いてもあくまで運営は当 事者中心で、そうすることで身近に 地域と当事者が触れることになる。



こういった活動により、当事者や病院が地域と知らず知らずに身近な関係になっていく。そもそも「当事者」「病院」「福祉施設」「地域」……と分離して考える事自体が考え方として違うのかもしれない。地域の中にある資源を分かりやすくマップにしていくことももちろん重要であるが、そういった考え方自体が当事者という枠組みを作ってしまっている様にも感じられた。その上で冨田病院が行っている活動は原点に返った、ひとくくりの「地域」の機能であるようにも感じられた。何故このような活動が行えているのか。それは冨田病院

のPSWがPSWとして地域に足を運び「地域」というものを言葉だけでなく、 五感すべてで体感することで生まれて きたものであることも発表を通し深く 伝わってきた。法律の整備などでPSW の必要性も増してきている一方、「誰に 向けての必要性」なのかが問われる状 況でもあると私は感じている。その上 で今回の発表が PSW として自身を振 り返る機会にもなった。



## 分科会Ⅱ 「PSW とかかわり」

医療法人社団 光風会 三光病院 高橋 幸恵

分科会Ⅱでは、地域の事業所で活躍される4名から発表があった。

多機能型事業所に所属する徳本健二氏 (愛媛)は、「生活訓練」で何をするかで はなく、"どんな人生にしたいのか"を一 緒に想像し悩むことで本人が変わってい った、他機関と業務分担しながら広い視 点で丁寧にかかわりたい、と話された。

グループホーム施設長の宮本雄太郎氏 (高知) は、パチンコ依存がある入居者の



金銭管理支援を通じて悩み、葛藤したが、本人も同様であることに気づき、話し合いを重ねることでお互いに納得できるようになった、とのことであった。

法人内の異動 5 か所目で宿泊型自立訓練事業所に所属する山崎秀樹氏(鳥取)は、業務を見失いそうになることもあったが、自分の目指す PSW 像があったことで、葛藤はどこの環境にもあると前向きに考え、多角的な視点を持てるようになったと振り返った。

作業所勤務を経て相談支援事業所を立ち上げ、運営されている竹原啓氏(山口)は、有志で「精神障害者の地域生活を考える会」を発足し週1回の居場所を提供しているが、来年デイケアを開所することが目標、人材育成や経営が課題、とのことであった。

座長の小谷尚子氏(徳島)は、利用者あっての私達であり、"誰のための何か"を常に考える必要がある、とまとめた。同じく座長の松宮透高氏(山口)は、利用者の病気のせいにせず、自分達が悩み、あがくところに PSW としての健全さがある、自分の本質はなかなか変わらないが刺激に対するバリエーション (対処方法や捉え方)が広がることが成長といえ

るのではないか、とのことであった。

所属機関は違っても悩みや葛藤は類似 しており共感できるところが多々あっ て、有意義な分科会であった。



## 分科会Ⅲ「私もスーパーバイザー ~私たちはこうありたい~」

医療法人社団 以和貴会 いわき病院 認知症疾患医療センター 吉見 篤人

中堅~ベテラン PSW が対象の分科会で、私が所属したグループには十数年キャリアのある方もおられ、学ばせてもらうことも多かった。

スーパーバイザー(SVR)役とスーパーバイジー(SVE)役に分かれ、スーパービジョンの管理的機能、教育的機能、支持的機能を含ませた内容のロールプレイを行った。SVE役をした方からは、管理的機能について「組織のルール、医



者の考え方で方向性が決まる。分かってはいるけど・・・」と何だかモヤモヤした気持ちになったという感想があった。また、教育的機能については「SVR がケースワークとは何かを説明しているが、何だか押し付けられている感じがした」「失敗し落ち込んでいる上に、なぜできなかったのか、なぜそうしなかったのかと問い詰められ増々落ち込んだ」と意見が出た。支持的機能では、SVR が SVE の気持ちを汲み取り、一緒に振り返り、SVE 自身に気づいてもらう、発見してもらうという内容であった。「こういうのができたら理想だよね」とグループ内で話し合った。

実際、自分自身のことを振り返ると、後輩から何か相談を受けた際、「○○先生はこういう風に考えているからこう動いた方がいいよ」「病院のシステムとしてはこうだから、まずは、□□に相談しないといけないよ」等、組織のシステム、医師の考え方に則り進めるよう



アドバイスすることはよくあると感じた。

スーパービジョンは、ベースに支持的機能があり、それを前提に管理的、教育的機能を織り交ぜていく。参加者の皆さんは、後輩PSWと時間をじっくり作ってスーパービジョンできればいいと思うが、日々の忙しい業務の中、ついつい、管理的に教育的にだけ言ってしまっていることが多いとのことだった。兼ね合いはとても難しいと感じた。

SVR は役割をどう果たすべきか、SVE と

どう向き合うべきかを改めて見つめ直すグループワークであった。私自身、まだまだ経験不足で、後輩の相談にどう言えばいいのか迷うことがある。「相談に乗る」ではなく「一緒に考える」という姿勢で臨むことで SVR の立ち位置が見えてくるのではないかと思い、今後、心がけていきたい。

分科会IV「サラリーマンソーシャルワーカーにならないために ~専門職としての PSW を目指して~」

一般財団法人 大西精神衛生研究所附属 大西病院 小山 聡士

分科会IVでは、サラリーマンソーシャルワーカーを「所属機関から求められる役割を最優先する あまり、PSW の価値や専門性などを考えず、自らの PSW のアイデンティティや主体性を持てない まま、当事者とのかかわりを業務としてこなしているワーカーをいう」と定義して話し合い、ソーシャ ルワーカーとしてのあり方を改めて深く考えることができた。

職場内のPSWとして求められている業務を行うことで必死となり、職場で言われたことを何の疑問も抱かずに、ただ粛々と仕事をこなしていく、まさしく指示に忠実、かつ適切に効率よく自分の役割をこな



すことが評価につながるサラリーマンのようになっていたと私自身、このグループワークをきっかけに気付くことができた。確かに、そういった業務をこなすことで目に見える結果を出すことは可能であり、達成感も伴ってくる。しかし、そこには PSW として、専門職としての『わたし』というものは存在していない。なぜならそうした業務は PSW でなくとも出来得ることであり、「クライエントの思いに寄り添う」という視点にてアプローチしていくことに PSW としての価値やアイデンティティがあるのだと認識することができた。

こうした、いわゆるサラリーマンソーシャルワーカーとならないためにも、日々職場内のワーカーとの話し合いを緊密にし、さらには所属する協会内のワーカーとも相談できる関係性、つながりを持つことが重要であるとグループ内での話し合いで感じた。

PSWには、クライエントの支援のために、 所属機関の意向と相反する厳しく難しい立場に立たなければならないことも時として存在する。そのようなときに、職場や協会の仲間や同志とのつながりがあることは大きな力となる。私もこのつながりをより強固なものとし、PSWとして更なる成長を望みつつ、日々精進していきたいと願っている。

